

キラキラやまのドーナッツ

チャツチャツ、とかきまぜる音が聞こえるのよ。

聞いているうち、音はすこし途絶えて、そしてシューッ、と油の音がするわい。

「お、長老さん。起きたのかい？ まだまだ、つくつてくからね」

見上げれば、車の中から、サングラスの青年がわしに笑いかけてくれる。

よい匂いも、やさしい熱気と一緒に流れておることじやろう わしがそれを感じられていたら、じやがな。

「ありがたいことジャバ。じゃがわしが独り占めしては、おぬしの世界の皆には申し訳ないジャバ、かおるちゃん」

「はは。そのくせ、キラキラリンはほんのすこししか作れないけどさ。くはっ」

そう言いながらも、手は止まらん。ほんとうに、彼が来てくれてよかったわい。さもなければ――

――あれは、キラキラルが爆発してすこしたころ。妖精たちはみな散り散りになってしまい、わしはひとりキラパティに封印も同然。それも身体から離れて、居るだけになってしまったときじゃった。

「やれやれ、こんな身体でも助かったのはいいが、たべものが、ジャバ」

いちご山には草木も多い。身体があれば外へ出てそれなりに食べられるのじやろうが、いまの身ではそうもいかん。

早く誰か、プリキュアを見つけてくれることを祈るしかないか。そう考えていたときじゃった。

バンッ!!

大きな音がして、ありもしない耳を思わず塞いでしもつたわい。まだ残った菓子が爆発したのかと音の方を見ると、

「あいつた。今回の移動はハデだねえ」

車がゆらゆら揺れておつて、中から音に似合わぬのんびりした声が聞こえてきたんじゃ。

「な、なんじゃ、いつたい!!」

車なんぞ、山を降りたときくらいにしか会わないが、丸い飾りのついたこんなのは見たこともない。丸い いや、これは、

「ドーナツ ジャバ?」

「はいお待ち。ドーナツ屋ですよ」

そう言いながら、車から降りてきたんじゃ。サングラスをかけて、長いエプロンをつけた青年が。

「な、なんじゃいつたい?」

キラキラルを狙う輩には見えんが いやいや、そんなことより、

「ど、どうやって来たんジャバ? ここは、閉じたキラパティの中ジャバ!!!」

「ドーナツ足りてないんでしょ? 持ってきましたよ」
わしが精一杯どなってるというのに、まるで感じておらん。

わしの前に、皿に盛ったドーナツを出してきおつて んんっ?

「きれいなドーナツジャバ。形も色も申し分ないジャバ」

そうじゃ、これほどのものは、わしでも作れん。それなのに

「これは一体、どうやってつくったんジャバ?」

わしが顔を上げると、ドーナツ皿を車についてるミニテーブルに乗せて、青年が言ったんじゃ。

「ああ、こうですよ。生地はもうできてるから、つと それっ!」

おおっ! 生地を車の屋根に放り投げおつた!?

「な、な、なんちゅうことをするんジャバ! せつか

5 キラキラやまのドーナッツ

くの生地を　　」

「まあ、見ててくださいよ」

青年の目線につられて車を見れば、半分窓になつてて中身が見える。ふむ。

型を抜いて、揚げて、粉砂糖をふって　車の中を生地が通つていきながら、勝手に出来上がつてくのお。

「はい、できあがり」

でてきたのは、ドーナッツじゃ。たしかに丸い、おいしそうな色と形、あたたかな気配、じゃが、

「だめジャバ、これは」

わしが言つた言葉に、青年がぼかんとしておる。なるほど、

「おぬしには見えんのジャバナ。せつかく生地に込められたキラキラルが、この機械の中をくぐりながら飛んでしまつてるのジャバ」

「飛んでる　キラキラリンがかい？」

「キ・ラ・キ・ラ・ル、じゃ！まあ、見えんならし

かたないジャバが　　お？そつちのはちゃんとおあるジャバ？」

車の奥の方に、ひとつビニールのかかつたものが見えたんじゃ。少しじゃが、キラキラルが湧き出しているドーナッツが。

「これ？　ウエスターの兄弟に練習で作ってもらつた、手揚げてあのやつだけど」

「そうじゃ、これこれ。これなら食えるジャバ」

「へえ　よつし、わかつた。ひさしぶりに手揚げで全部つくつてみようかね。げは　——」

——そういうなり、身体が弱つてるわしを寝かしてつけて、どんどんドーナッツ作つてたんじゃからのお、この青年——胸のバッジに書いてあるから、かおるちゃん、かの。

目を覚ましたころには、車についてるミニテープ

ルが、ドーナツで一杯になっておった。

「しかし不思議ジャバ」

車に近寄つたわしを見て、かおるちゃんが手をとめたわい。

「ん？なにが？」

「キラキラルジャバ。これだけのドーナツなら、キラキラルはもつと山盛りのはずジャバが」

「そりやあたりまえだよ。オレ、天才だけどただのドーナツ屋で、パティシエじゃないもんね」

そう言うて、はははと笑つんじや。ん？

「しかしのお。この身体では味こそわからんが、作り方を見る限りは一流パティシエと変わらんジャバ。もつとたくさんキラキラルが生まれても不思議じゃないジャバ」

わしがそう言うたら、かおるちゃんは腕を組んで車の窓から顔を出したわい。

「そのキラキラさんはぎ、きつと世界が好きな人がつくるもんじやないかねえ。オレもね、オレの世界

だつたら、もつともつと笑顔にできるけどさ、ここじゃ半分がいいとこだよ、たぶん。ぐはっ」

オレの世界が、なるほどのお。

「でもね、それでいいんだよ。世界を守るのは、世界といつしよにある人だからさ。

いやあ、でも長老うてのはたいへんなもんだよねえ。タルヤんのとこもそうだったさ」

タルヤん？ いや、おそろくどこか別の国の長老のことなのじゃろつ。

「そうかもしれん。さて、ペコリンたちがプリキユアをみつつけてくれるといいのじゃが」

ん？車のほつ動きが止まったのお。なんじやろつ、と見上げれば、かおるちゃんが口をぽかんとあけておつた。サングラスの中の目も、大きく開いているのがわかるくらいじや。おどろいておるのか？

「ははは、ようやくわかりましたよ。呼ばれたわけがね、げはっ」

7 キラキラやまのドーナッツ

いきなりにこにこ笑いながら、またドーナッツづくりにもどつてくかおるちゃんを、今度はわしがぼかんと見る側じゃった。

呼ばれた、じゃと？ いや、そもそもじゃ、

「かおるちゃんは、どうしてわしが困っていることがわかつたんじゃバ？」

にこにこ顔がこつちを向いて、そのままわしの顔を眺めておる なんじゃ？

「ちっこいのが知らせてくれたんだよ。長老が閉じ込められちゃったから助けてくれ、ドーナッツをいっぱいあげれば助かる、つてね」

ちっこいの 妖精のだけかか！

「で、言われた場所にとにかく飛び込んだ、つてわけ。あの子は、この中までは入れなかつたみたいだけどね」

ペコリンかと思つたが、違つた。あの子はそこま

で落ち着いてはおらんしのお。

「プリキュアはオレの世界にもいてね みんなでしあわせゲットする子に、いつでも完璧目指しちゃう子、信じて祈る子に、せいっぱいがんばる子

揃いも揃つてお節介せっかいでさ、みんなで助けに行こうつて言われる前に、オレだけ来たつてわけ。ぐはっ

プリキュア プリキュアじゃとお!？」

「伝説のパティシエを知つておるのじゃバ!？」

思わず車に飛び乗つたわしに、かおるちゃんがじつと見つめてきたわい。なんじゃ？

「悪いね。プリキュアはプリキュアでも、パティシエじゃないんだよ。さつきも言つたでしょ、たぶんこの世界のプリキュアじゃなきゃ、半分も役にはたさないよ オレと同じで」

笑つてはおるが、さつきと違つて、ちよつとさびしい顔じゃ そうか。

「それでも、ちよこつと支えることならできさ、こんなもんで足りるかい？」

わしの両側には、さつきよりさらに一回り大きなドーナツの山じゃ。一流パティシエほどではないものの、いや、わずかしか作り出せない中では信じられんほど沢山のキラキラルが、わしを取り囲んでおるわい。

「たしかにこれで、しばらく身体をつなげそうじゃ。ペコリンがプリキュアを見つけるまでな　感謝しておるジャバ」

「なあに、お互いさまだつて。くは」
歯を光らせながら、ボウルを片付けはじめよつた。帰る気、かの？

（いつかウチの子^{プリキュア}たちのほうが、支えられることもあるだろうしね——）

ん？なんじゃ聞こえたような気がしたが　わしが訊こうとした瞬間、そこから大きな声が響いてきおつた。

『キュアラモード・デコレーションっっ!!』

こ、これは

「見つかったのじゃなペコリン、プリキュアが！つと、ととと？」

い、いきなりわしのいたミニテーブルが移動して、床まで降りてしもつた!!

「かおるちゃん、なにするジャバか　ん？」

見上げた先に、もう車はなかった。ただ紙が一枚、わしの前に落ちてきただけで。なにに、こつちのプリキュアをよろしく、長老さん」か

（プリキュアはオレの世界にもいてね　）

読んだとたん、かおるちゃんの言葉がよみがえつた。そうじゃな、プリキュアに『なる』普通の子たちじゃ。わしらは救われるだけじゃなく、支えることも必要か

「まあ、やってみるジャバ。おまえさんほど支えられるかわからんジャバがな、かおるちゃん」

—おしまい—

幕間

「——さて、と」

夏の夕日も公園の向こうに落ちて、もう店じまいしようかな、って感じのドーナツカー。そこから出てきたサングラスのひと　かおるちゃん　が、屋根の上のドーナツ生地の入りにフタしてゐるのを、わたしは車の影からそおつと覗いてたの。

「手揚げしかダメなんだもんねえ。今度はいっぱい揚げられるようにしとかないと」

いつものドーナツメーカーにほろをかけて、いつもは使わない大きめの揚げ鍋を取り出して、

「生地も作り直さないとね　なにせ、こつちと向こうは時間がちがうみたいだから」

車の中の冷蔵庫を開ければ、卵に小麦粉にお砂糖がいっぱい。いつもはもう作っておいた生地を保存してあるのにな。

「ま、こつちが夜の間だけだからね。かおるちゃんドーナツのキラパティ支店は。ぐはっ」

「　で、キラパティ支店って、どこのことなの？　かおるちゃん？」

車の窓の前に回ってそう言ったら、かおるちゃんのサングラスがちよつとずり落ちた。成功、かな？　「なんだブリ嬢ちゃんか。脅かさないでよ」

サングラスをすつ、と直して、かおるちゃんが言った。わたしとふたりのときは、ブッキーじゃなくてブリ嬢ちゃん、なのよね。いつもどおり、か　でも、「脅かしてるのはかおるちゃんでしょ？　春ごろいきなり消えちゃつたの、みんな心配したんだから。」

覚えてるんだよ、あのときいきなり閉店まぎわのお店で小麦粉やお砂糖買いまくって、夕方なのに生地作つてたの！　また、なにかへんなことやつてるでしょ？」

あのときは捕まえられなかったけど、今度は逃さないんだから！

「あー しょうがない、か。なんなら、一緒に行く？」

「え？ いいの？」

あっさり言われて、わたし、かえってぽかんとしちゃった。

「もう高校生だし夏休みだし、ちょっとくらい夜歩いて大丈夫でしょ。なんならオレから親御さんに連絡入れとくけどさ」

けど、ちょっと早口になったかおるちゃんの顔を見て、わたし思ったの。ああ、これってきつと

「いい。わたし電話するから。で、ほんとにどこに行くの？」

理由はわからないけど、きつと、わたしに来てほしいんだ、って。

「そうねえ ブキ嬢ちゃんたちの後輩のところ、かな。なぐにせ、妖精さんに呼ばれちゃったからさ。げはっ——」

ドーナッツ・しんじてる

「うむ、ちゃんと閉まってるジャバ」

夜のキラパティシヨップの戸締まりも、我ながら
だいぶ慣れてきたのお。

「ま、開いてたからといっても閉められんのジャバ
がな」

つい声にだしてしまつて苦笑したわい。もちろん
キラパティシヨップ自体をクローズしてしまえば問
題ないのじゃが、さすがに毎日店が消えては怪しま
れるからの。

シエルが泊まるようになって、助かっておるわい。
もしものときは頼めばよいからのお。

「シエル——キラリン、ジャバか」

助かつてはおるのじゃが、ひとりになったところ
を見ておると、少し気にはなるのお。見せないよう
にはしておるようじゃが、息つくところがため息に

なることも多いようじゃし。

「さて、どうするジャバか」

プリキュアではあるが、妖精のことじゃ。わしも
力になれるものなら

ズダーンツツ!!

「うおお!? な、なんジャバ??」

ひどい音と揺れに驚いたが、これは覚えがあるぞ。
振り返ればほれ、広い客席の真ん中にいつぞやの
車じゃ。ということは

「や、ひさしぶり、長老サン。どう、調子は?」

車から降りてきたのはやつぱり、春に見たサング
ラスの青年じゃ。

「かおるちゃん、じゃったジャバ? かしなんじゃ、
前よりひどい音ジャバ」

「ああ、そりゃあね。今日は、ひとり分重いもんだ
から」

なんじゃ、くすくす笑っておるが その向こう

から、なにか出てきおったぞ？

「そんなに重くありません！　ええと、こんにちは」

栗色の髪が車から降りてきて、わしの方を見ておる。女の子じゃが、いちかよりは歳上か　あきらたちと同じくらいかの？

「わたし、山吹祈里いのりっています」

そしてそのまま腰をかがめて、わしに目線めせんを合わせて名乗りおった。

わしの姿に驚きもせん、ということとは、じゃ、

「かおるちゃん、ひよつとして、この子は」

「そ、うちの世界のプリキュアだよ」

わしの視線の先で、かおるちゃんが大きく頷いたわい。やはり、の。

「え？　か、かおるちゃん!？」

「なアに、心配いらないって。こつちの世界にも、こつちのプリキュアさんがいて、この長老サマも仲間だからね。いろいろ問題抱えながら、みんな頑

張ってるよ」

女の子——いのり、じゃったか。ずいぶん慌てた顔をしておったが、説明しておらなんだのじゃなしかし

「そ、そうなんだ　じゃあ、かおるちゃん。わたしも、なにか手伝ったほうがいい？　ううん、いちど戻って、みんなを呼んだ方が　痛っ!」

コッソとかおるちゃんの指が女の子を突きおったわ。

「プキ嬢ちゃんは、世界ひとつ救ったんでしょ？　よくばりすぎんじゃないの。ぐはっ

さーて、ドーナツつくるから、そっち手伝ってよ。なにせ手揚げじゃないと食べてもらえない世界なんぞねえ」

かおるちゃんは笑っておるが、わしにはよくわからん。なぜ連れてきたのじゃ、別の世界のプリキュアを　？

「長老お、こんな夜中になーに騒いでるのよ？」

一応人間の姿になうて、私は店の様子を見に来たの。ひどい揺れがして、さすが地震で有名な国だ、って思ってたのだけど、揺れだけじゃなくて、話し声がずっと聞こえてたから、なのに長老、

「おお、シエルか。起こしてしまったジャバか？」
ですって。あれで起きないのなんて、上で寝ているペコリンくらいよ。

「ウイ。それで、だれ？」

長老の後ろには、店のショーケースくらいある車。上の方のかざりがすると、ドーナッツスタンド、かしら？

それはいいけど、その長老と車の間にいる人たちって、見たことがないわ。

「かおるちゃんと、プリキュアさまジャバ」
かおるちゃん？ 日本語で、ちゃんって呼ぶの

は女の子だったわよね。じゃあ栗毛色の子がそっか。で、こっちのサングラスかけた男の人が、え!!?

「あ、新しいプリキュア!？」

思わず指さしちゃったわ。お行儀悪いのはわかってるけど、でも、でも、この人がプリキュアだったらー!

「どっちかって言うと、古いプリキュア、かねえ。げはっ」

「かーおーるーちゃん!？」

あ、あれ？ 男の人の方が『かおるちゃん』なの？

「はいはい、ごめんごめん」

『かおるちゃん』が女の子に謝ってるのを見て、私はちょっとため息ついた。そっか、男の人のプリキュアなら、わかるかもって思ったんだけど

「ん？ どうしたジャバ、シエル?」

気がついたら、長老の顔がアップになってた。ちょっと、ぼーっとしてみたい、私。

「寝ぼけてるっぽくもないし、ひよっとしてお腹すいてるかい？どつ、かおるちゃん手揚げドーナツ」

長老のとなりに並んだかおるちゃんが、私に手渡してくれた。ドーナツツ、って言っても えい。

「え？おいしい!!？」

びっくりした私の前で、かおるちゃんが笑ってるわ。信じられない だって、

「どうして？こんなにおいしいのに、キラキラルがこんなに少ないなんて!!」

形は普通でも、味だけだったらパルフェだもの。なのに、なぜ？

「かおるちゃんたちは、別の世界の者だから、らしいジャバ。じゃからの、シエル。いくらプリキュアさまとはいえ、手伝ってもらうことはできんのジャバ」

そっ か。

「それで、キラパティショップに何のこ用？長老のお茶友達なら、私は寝かせてもらっわ」

私はくるっと振り返りながら髪を後ろに跳ね上げ

た。イヤな感じだな、って自分でも思うけど、お互い力になれないなら、この方がいいわよね って、え？

「わたしは、用があるよ、シエルちゃん」

思わず顔を上げたわ。今まで長老たちの後ろにいたはずの女の子——別の世界のプリキュアが、目の前に回ってきて、私の手を取ってるんだもの。でも、

「何の用？力にはなってもええないんでしょ？」
私がちよつと目をそらしながら言ったら、私の手が、ぎゅつと握られたのよ。

「あなたにはきつとできるわ。わたし、信じてる」

え？
いきなり言われて、私はしばらく声が出なかった。

「信じてる、って いま会ったばかりよ。私のことなんにも言っていないし、そんな口先だけで」

でも、私の言葉は、目の前で首を振る顔に止められた。

「あなたには自分の本当に 本当の本当の本当に やりたいこと、それがわかるって、それをできるって、わたし、信じてるの。だって、ね」

だまって見てる私の目の前に、穴が見えた。

「わたしね、ここじゃない世界で、プリキュアとして戦ったの。でもひとりで戦ったんじゃないわ。ともだちみんなと、あとこれと、だよ」

穴の周りは、茶色いまんまる。

「ドーナッツ？」

「そう。かおるちゃんのドーナッツのちからも借りて、戦ったの」

ドーナッツで、どうやって？

「ふふ ドーナッツは、とっても強かったよ。半分くらい、倒してもらっちゃったもの。ね？」

後ろのちかおるちゃんが、サングラスを直しながら、しょうがないな、って感じでうなずいてた。それをちらっと見ながら、目の前の女の子は続けたわ。

「あなたは、かおるちゃんのドーナッツをおいしいっ

て言ったでしょ？ かおるちゃんをプリキュアと勘違いしたのに、プリキュアじゃないってがっかりしたのに、それでも、かおるちゃんのドーナッツのこと、ちゃんと味わってくれてるんだもん」

ドーナッツをもうひとつつまみ上げて、私に手渡して、

「だからね、わたしにはわかるのよ、あなたともだちとお菓子を作ってたかうあなたなら、きっとできるって。わたし、信じてる♡」

渡されたドーナッツを口に入れたら、からだの中に広がっていったわ。味と、香りと、あと

「あなたは だあれ？」

私はもう一度前を見た。私に広がってるもうひとつを確かめに。

「わたしは山吹祈里、ブッキーでいいよ。プリキュアとしてなら、キュアパイン、だけど♡」

パイン パイナップル！ そう、っか。

「わかつたわ、アナ　　パイ。信じてもらえるだけのこと、私、してみせる」

「まゝた、いきなりジャバ。せわしないジャバねえ」
ふたりがドーナツスタンドと一緒に消えたあとを眺めながら、長老が言ったわ。

私は紙袋にドーナツを詰め込んで、何に使おうか考えてただけだ。だって、お盆に山盛りのドーナツ残していくんだものね。

「シエルは元気ジャバ、の？」

だから、長老にそう言われたとき、ちよつと嫌味で返しちゃうかと思っただけだ。やめたわ。

「ま、先輩にあれだけ信頼されて、やらないわけにいかないわよね。それに」

最後のドーナツを袋に詰めて、お盆といっしょにキッチンの棚に入れながら、私は続けた。

「それにね、パイ　　アナナスに信じてもらうちゃつたんだもの。ステキなパフェにしないわけにいかないでしょ、パティシエとしては」

ぱたん、と棚を閉める音と一緒に、背中からは優しい視線がやってきてる。もう、しょうがないな。

「それじゃ、寝るジャバ」

「ええ　　あ、それと長老、これ、いちかたちにはナイシヨ、ね」

ぼんつ、つと妖精の姿に戻って私が言ったら、長老が訊いてきたの。

「ほう、いちかになら喜んで話すかと思つたのジャバが　　なぜジャバ？」

だから、私はテーブルを見上げて答えたのよ。

「　　先輩は、いらぬもの。いちかには」

ちらつ、と背中越しに見てみたら、長老の顔が笑つてた。

「かもしれん。かもしれんジャバ」

何度も頷く顔を見て、私はちよつと、ほつとしたわ。

—おしまい—

閉じた幕のつら側で

「——ねえ、かあるちゃん」

ドーナツカーの助手席から、窓の外を眺めながら、わたしは口を開いたの。

「ん？ なんだいブキ嬢ちゃん」

外はわけのわからない景色。きつと行きと同じで、普通じゃないとこ走ってるんだろつな そんなことを頭の隅で思いながら、でも頭の真ん中からは、あの姿が離れてくれないわ。

「あの子、大丈夫だよね」

そう。あの不安そうな顔を見てたら、つい口が勝手に動いちゃったのよ。でも、ね

「な〜にをいまさら。あんだだけ派手に言っちゃってさ
いてさ」

うん。

わたしはちょっとだけ頷いた。

それは、そうなんだけど ラビリンスのことだつて、あれでよかったのか、いまでも考えること、あるんだよ？

まして別のプリキュアさんがいる世界なんだもん。もし、もしも、

「もしも、わたしの信じてることが間違ってたらず痛っ！」

すこしうつつむいたわたしのおデコが、いきなり痛くなったの。

「それ以上は、あっちのプリキュアさんたちに失礼つてもんさ」

顔を上げたら、人差し指。かあるちゃんが、うつついたの？

「まかせたんだろ？ あとは祈るだけでいいよ。

本当にだめなときは、この車で突っ込みやあ、ちょっとは役にたてるでしょ。げはっ」

え？ ちょ、ちょっとかあるちゃん!?

「せつかくブキ嬢ちゃんが発破かけてくれたんだ。そ

んくらいはフオーするさあ。

ま、そんなことにならないように、オレの分も祈つ
といて、よっ、と!!」

かけ声みたいな声といっしょに、車があくんと
揺れた。思わず窓につかまったら、その外にはいつ
も公園

「こらーっ、かおるちゃんにブッキー！ あたし置いて
なにしてんのよ!!」

戻ったんだ、って思った瞬間、窓から大きな声が響
いてきた あ、いけない。かおるちゃんがおかし
なことしてたら、一緒に乗り込むんだっけ、ラ
ブちゃんと。

「ちよっつとブッキー、なに笑ってんのー!」

怒った声だけど、目の色がほっとしてる。目の前で
消えちゃって、心配かけちゃったな でも、そっか。

ラブちゃんも、きつとあの子にも、やり方がある
んだよね。わたしが何を言っただって、最後に決める
のは、あの子なんだから

「そうだよな。わたしは祈りだもん、祈るだけだ
わ あ痛^{いた}っつ!!」

窓の外からの愛のゲンコツもらいながら、あの子と
重なったラブちゃんの姿を見て、わたしは祈ったの。

『わたし、信じてる』って♡

—ほんとにおしまい—

くらいむ えぶりい まうんでん

ちよいとピーチはんに用があつて、よつば町までやつてきた帰り。公園の端っこちよいと見上げたらまだ車が止まつとつた。

「おばんやゝす。かおるはん、まだ片付けせえへんのか？」

声かけて、ちよいと突き出てるテーブルにひよいひよい、つとのつかつたら、いつものサングラスが窓開けてこつち向いたわ。

「ああ！ちよーどいいとこに来てくれたねえ、タルやゝん」

けど、いやゝな感じや。このにこにこ顔には騙されへんで？

「ちよーつとき、助けてほしいんだけどねえ」
「そう言つたらすぐ、わいの身体は空中に浮かんだつた。」

「ちよつと出かけるからさ、ここに残つて、ごまかしてほしんだよなあ、タルやん？」
「ごまかすやて？な、なんやなんや？わいになにせえつちゆつんや??」

「いい夜ですねえ、コッへの旦那だんな。それに、いい街だ」

サングラスをかけた青年が、ふと黙つたかと思えば、いきなりそう言つた。

吾輩わがはいがいつも居るフラワリーの植物園に、いつの間にか屋台のような車が現れてから30分。車から降りてくるなり助力を願つ言葉ことばを滔々たうたうと語つていたとは思えないほど、静かな口調だ。

うむ。平和な街だな。

吾輩は大きな身体をそちらに向けて、声なき声で応えた。フラワーや若き友　ブロッサムにマリン

以外には聞こえぬはずの声だが、

「平和は、苦手ですかい？」

斜め下から、サングラスがこちらを向いた。ふむ、やはりこの青年には聞こえるのか。吾輩が気づかぬうちに車をここに持ち込んだのだ、そのくらい驚くにはあたるまいが。

曲がりなりに戦士の伴ともだからな。掴つかみ取った平和に文句はつけられん が、習性はまた別だ。

にやり、サングラスの陰で目が笑った。この青年、見た目とは違うようだな。名前も呼びにくいほどに軽いのだが

で、吾輩を連れてゆくと云ったか、かあるちゃん？

まったく、青年に「ちゃん」など、いくら歳が離れていてもつけたことなどないというのに。

「ええ。ただ 旦那の乗れるところが屋根しかないんですけどね。いいですか？」

旦那、とは吾輩のことか？ふむ。

「なにせオレよりかなり年上でしょ？名前呼びするのもなんだしね」

そうか。年齢などはあつてないようなものだが、気持はいただこう。しかし

車の中をのぞくと、小さな影がぶすつとした顔をしておる。

その連れは、不満そうだが？

目を青年に戻すと、肩越しに両手のひらを上に向けて、

「ちよつと、無理して連れてきちゃいましたからね。鳥さん——シロップくんには、どうしてもお願いしたかつたん」

青年が言い終わる前に、車の中から鳥が飛び出してきた。

「だーれが『お願い』だ！誘拐たるあれは!!」

「まあまあ。鳥さんのところは同居人が多いからさ、車でいきなり突っ込んだら大騒ぎになっちゃうんだよ。

それに 納得はしてくれただら？」

「このデカいおっさんと同じ説明してくれりゃ、もつと早く納得できたんだけどな。ったく」

ぶつぶつ言いながらも、また車に戻っていく鳥くんの背中を眺めておると、微笑まじさが湧いてくる。若い妖精なのだな。よし。

若いのが行くのに、吾輩だけ残るわけにもな。それに

ちらと目線を上げると、なるほど。車の上には、簡易のベッドらしきものがしつらえてあるな。

ここまで準備されては、嫌とも言えまい。どこへ何をしに行くのかは知らんが、妖精のためとあらば、老骨に鞭打つとしようか。

デカいおっさんを屋根に乗せて、車がまたよくわからないとこ走り始めた。

「あんたと、デカいおっさんと、俺、って、こんだ

けかよ。友達少ねえだろ、おっさん」

まわりは白だかピンクだかのモヤモヤ。俺がよく、他の世界に手紙届けに飛んでるとこみたいだ。

「知り合いは多いんだけどねえ。パン屋さんとこの子——コロネくん、だったかな？ 彼にも声はかけたんだけどさ、変身できない自分にお菓子作れない、って断られたよ。頼まれた相手が相手だから、人間には声かけにくいしねえ」

君も人間ではないのか、かおるちゃん？

屋根の上から、声がした。つつーか、重さが伝わってきた感じだ。

「ん、忘れましたよ。妖精の居るとこあっちこっち行っって過ごしたりもしてますからね」

そうか。吾輩は、妖精の困りごとなら行くだけだ。鳥くんもそうだろう？

重さが少し軽くなった。ああ、そうだな。

「ちっ！ 俺だって妖精のはしくれだからな。困ってるってなら手ぐらい貸さあ。」

で、どこ行くんだよ。そろそろ行き先教えるおっさんー。」

ん？ なんだおっさん、いきなり上向いて

「Climb Every Mountain」

「なんだ、そりゃ？」

いきなり歌いだして、なんのつもりだよ、おい。

歌詞を和訳するとこうだ。『すべての山に登れ

高いのも低いのもすべて すべてのを道を辿り すべて
の川を渡り すべてのを追いかけて』

頭の上から、デカいおっさんの声が響いてきた。

「なんだいそりゃ。なんでもかんでもやっちゃまえ、つてのか？」

「かもね。ほんと、若いうちはそれがいいんだけどさ」

あ、このおっさん、にやって笑いやがったぞ。

「そんじゃ、登ろうかね。いち」山に！」

「暗い夜のキラパティシヨップにわしひとり、ジャバか」

夜に消えていては怪しまれると、開けておるのはいいもの、よく泊まってあったシエルは、ヒブリーが待ってるから、と自分の店に帰ってしまったおるからな。まあ、戸締まりしっかりしてくれておるから安心なのじゃが。

「さて、そろそろ寝るか ジャバ!?」

どんつ、と大きな音がして、シヨップがくらりと揺れたわい。

じゃが、今度は驚かんぞ。これで3度目じゃからな ほれ、いつもの車じゃ。

「おお、よく来たジャバ、かおるちゃ ん？」

じゃが、今度はいつもと違っておった。

「悪いね。ちよつと別の場所に用があつてさ。中、誰かいますかね？」

車は、キラパティショップの外におったのじゃから。
「わしの他には居らんが 別の場所、ジャバ？」
そう言う間に、キラパティショップがトランクに
閉じていった ジャバ!?

「長老さんは知ってるどころなんで。ちよっと、連
れてってくれないかねえ」

そのまま、トランクを車に詰め込んでしまったわい。
いや、かおるちゃんの頼みなら別にかまわんが
わしの知っているとこ、じゃと？

「さあつて、ついたついた」

小鳥のときの俺と同じくらいないじいさんに、道き
きながら登った山のご真ん中。ゆっくりゆっくり着
地したのは、緑の芝生の真ん中だった。

冷や汗かきながら降りてく姿には笑っちまったけ
ど、まわりを見るとわからなくもねえな。俺だつて、

キュアローズガーデンに車でガラガラ入られたら怒
るしよ。けど、

「本当に、そこにいるのがその なのか、おっさ
ん？」

「そうそう。途中で説明したろ？ 彼にさ、オレた
ちのお菓子づくりを見せてやらなきゃね」

「べつにいいけどよお」

時間もなかるう。早くやろうではないか。

屋根の上から、声と一緒に大きな身体がごろん、と
転がって どん、と降りるのかと思ったらふわつ
と着地した。やっぱ同じ妖精なんだな、このデカい
おっさんは

「とりあえず、材料だなんだは山ほど積んであるし、コ
ンロもいいの積んできたんだ。できるだけやってよ」

そう言つて車の奥を漁り始めたおっさん見ながら、
俺は人間型に変身して手前の冷蔵庫を開けた。来る
途中で、生地はもう作っちゃまってからな。あとは
焼くだけ っと、

「まあいいか。ほらよ、ホットケーキ、1枚めは味見用だ」

「ほう、なかなかのものじゃバ」

小さいじいさんがそう言う横で、デカいおっさんが半分くらいつまんでいった。

「くち濁さなくたっていいぞ。形も色もアレだしな。だけど、うまいぞ。なんだって自分でうまいもん食いたく練習したんだから」

「誰かさんに教えてもらいながら、かね。ぐはっ」

「よ、余計なこと言うんじゃねえ！ ほら、本番用、2段重ねホットケーキ！」

なんで知ってたんだ、このおっさんは

「そんじゃ、ホットケーキをもっとうまく食べるための」

おっさんがくるつと振り返ったと思ったら、俺のホットケーキに白いもんが乗っかってた。

「ほい、かおるちゃん特製アイスだよ。ただ、夏用のドーナツに乗せるのに工夫したやつだから、ちよっ

と寒いやねえ。なんで、これに」

ぼっ！

「これでどうだい？ げはっ」

酒かけて火いつけやがった!?

ほう。洒落たこともできるのだな。

「デカいおっさんもなんかうなずいてるし、まともな料理なのか、これ？」

「見よう見まねってやつですよ、まあ本職にや負けますしね。でもなにせ、なんでも屋だから。ぐはっ」

「

ふふふ。なんでも屋、結構ではないか。ならば吾輩も負けられんな。

デカいおっさんが後ろを向いて、なんかゴソゴソやってると思ったら、振り返った手にフタ付きのコップを持ってた。

菓子を食べれば飲み物が欲しかろう。これはなんの変哲もないただのジュースに見えるがな、心の

大樹の樹液、我ら妖精の飲みものを入れて

ぼたぼた、っと何か入れてフタをしたコップを、大きな身体でぐるぐる振り回した？

さあ、飲むがいい。大妖精特製シェイク、というほど大層なものではないが、普段は子供たちにかさぬものだがな。

手を止めて差し出したのは、ミルク色のふわふわしたドリンクだった。

「こいつも子供だろ？」

いや。悩んで苦しんで、その上で助けを求められるなら、もつ子供の殻かぶは脱げておろう。脱げかけている途中かもしれないが。君もだぞ、鳥くん。

ん!? な、なに言ってるんだ!

ははは。悩め悩め。悩んで、吾輩より大きな妖精になってくれ。我が同胞たちが困ったときにも手を貸せるほどにな。

「変身すりゃあ、デカさでおっさんに負けねえよ。けど、ま、覚えとくよ。俺は飛べるからな」

3人の妖精がお菓子を作っているのを、わしはそばでじっと見ておった。

話していることからしても、おそらくは違う世界の違うプリキュアさまの友である者たちじゃろうに、こうして一つのものを作ってくれておる。それも

「オレに声かけてくれたとき、心につたえてきたよねえ。心配を、さ」

心配、か。

大きな妖精の言葉にうなずきながら、かおるちゃんちゃんが歩き出したのじゃ。

「一度目は春。いちご山の妖精たちがこわれる前に早く!」だったかな」

まだフランベの炎が上がるホットケーキをトレイに乗せて、

「二度目は夏。ねえさんがこわれる前に早く!」

だった」

大きな妖精から受け取った飲みものも乗せて。そのまま、まっすぐ歩いて行く先には

「だからさ、お前さん。今度は叫んでいいんだよ。

『ぼくがこわれるまえに早く！』ってさ」

横になって眠っているジャバ。青い妖精——ピカリオが。

「心配、ね。あのなあ、俺たちこんなことやってるけど、誰でも喜ぶようなモンなんて作れねえぞ」

さつきまでわしと同じ大ききの鳥だった妖精が、腕を組んでそう言ったわい。

「そうだねえ。世界一のパティシエなんかには勝てないよ。でも、目の前のひとりだったら笑顔作れる。

自分をみせてくれるのは、自分で作ったもんだけだ、ってね。げはっ」

かおるちゃんが、前にも見せた笑い顔でそう言ったわい。

案ずるな、見せるのはちゃんと起きてからだよ

い。吾輩たちはちゃんとおる。遠く離れていても、ちゃんとおる。

そして大きな妖精もまた、静かな声でそう言ったわい。

そう。違つ世界の妖精たちが、ひとつのものを作つてくれておるのじゃ。それも別の世界の、たった一人の妖精のために。

「『お菓子で世界を笑顔に』 聞こえておるジャバが、ピカリオ。夢見ていた世界が、ここにあるのじゃぞ」

わしがそう言うたら、眠るピカリオの前にトレイを置いたかおるちゃんがピクツとした。なんじゃ？

「夢見ていた世界、ね」

頭を何度か振って、上を向いて、そして、歌い始めたのじゃ。

「あん？ またその歌かよおっさん」

小さな鳥に戻った妖精が言ったわい。また？

「この歌だけだね。最後にハテナつけるとわかりや

すいんだよ」

「ハテナ？」

「そつ。Climb Ev'ry Mountain? すべての山に

登ったのかい？ ってね」

『すべての道を辿ったのか？ すべての虹を追っ

たのか？』か。なるほどな。

「んなのあつたりまえじゃないか。登ってねえし、た

どってねえし、追ってねえ、だから行くんだ、どこ

までもよお！」

「ああ、そのとおり。だよな、旦那」

こくり、大きな身体がふたつに折れた。

そつ。だからその歌詞は確かこう続く。『すべて

の山に登れ 夢にたどりつくまで』とな。

「なんだ、それならそつ言ってくれよ。めんどく

せえな」

(もう、行っちゃうのか?)

そのとき、わしにはピカリオの声が聞こえた気が

したのじゃ。

わしには ? いや、違つよつじゃな。

夢に向かつて進む意思のある限り

ちらつと、緑の大きな姿から目線がかおるちゃん

に飛んだわい。

「オレたちが見捨てることなんてないさ。だろ、鳥

さん？」

かおるちゃんが、大きな目に向かつてうなずいた

と思つたら、小さな鳥に向かつて言つたのじゃ。

「あつたりまえだ！ 俺の本業は希望の手紙届けだ

ぞ。だーれが見捨ててなんかやるもんか!!」

なるほど、なるほどのお。

「これは失礼したジャバ。確かに、まだまだ先に夢

はあるのジャバね」

「コッペ、いまお帰り？」

かおるちゃんの車から降りて、消えてゆく車を見送っておる背中から、フラワーの音が聞こえてきた。おらんようだ。

「ああ、ただいま戻った。時間はさほど経過して
「あなたの感覚で考えないで。ずいぶん遅かったじゃない。つぼみが心配してたわよ？」

「ふむ。出かけたのも暗かったが 冬ということ
を忘れておったな。」

「そうか、それは悪かった。実は妖精の頼み事だ
そうだな。すこしばかり手を貸してきた。」

「あら、妖精？ひとり、人間のひとがいなかったか
しら」

人間、か。ふむ

誰かを真に想い、無私に無心に手を差し出そうとするなら、吾輩はその者を『妖精』と呼ぶことに何らのためらいもない。姿かたちなど、些細なことだ。

ふふっ

小さな笑いが、皺の顔をほころばせた。

笑うか。まあ、よいが。

「違うわ。 あなたは本当に、コツペだわよ。本
当に。」

「うむ。吾輩はいついかなるときも、フラワーにふ
さわしい妖精だ。そうでなければならん。いまさら、
言つまでもないことだ。だが

「まあ、珍しいわね、あなたが歌うなんて。サウン
ド・オブ・ミュージックの中の曲だったかしら？」

それは知らんが 我らは相応な山に登ったも
のだが、すべてではない、と思つてな。

吾輩がそう言つと、フラワーがそばに寄つて、手
を吾輩の胸にあててくれた。

「いいじゃないの。残りの山には、つぼみが登つて
くれるわ」

一枚の手のひらではあるが、それはとても、とて
も暖かいものだ。

託すもまたよし、か。

「ただーい、ま」

ちいさな声でそう言いながら、そーっと窓から入って、と。ふう、だれもいねえな。

「お・か・え・りー!」

「ぐへっ!?!」

「こんな遅くまで、どこほつつきあるいてんのよ! お仕事じゃないのは、メルポから聞いているわよ!」

つつ、くるみかこの野郎!

「背中を叩くなって、なんども言ってるだろうが! 鳥には大事なんだぞ!!」

「あらそう。じゃあおしりにしてあげるから、こつつき出しなさいよっ!」

ちよ、ちよと待て、なんだそのデカイフライパンはっつ!!

「っと、まあお仕置きはこのくらいにしてあげるわ。ココさまが心配されてたらコレで一発いってたけど、気づかれてないようだし。」

そうそう、キッチンに置いてあったの食べたわよ」

ふう、どうなるかと って、キッチン?」

「はじつにコゲコゲのホットケーキよ。まあ、まずくはなくなっただんじやない?」

ああ、夜食用に作っといたやつか。ま、こんなやつらでも食べさせがいはあるってもんだ。同じ妖精仲間だもんな。

同じ妖精仲間、か

「くらいむ えぶりい まうんてん」

「はあ? なによ、その歌」

いっけね、寝てる青い妖精^{ヤツ}思出しちまった。

「なんでもねえよ。言われなくても登りまくるだろうしな、こいつなら」

ひゅん

風きるような音がして、目の前がちょっとぶれた気がしたわ。

——塾で遅くなった帰り道。公園のかおるちゃん
のドーナツツーカーにまだ明かりがついているから、変
だなんて思って寄ったのよね。

そしたら中にはタルトがひとりだけ。ドーナツ焼
いて、ジュースも出してくれたけど、なーんか怪し
いな、って思ってたのよ。

それで、かおるちゃんはどこにいるのか、ちょっと
キツク訊いてみたときだったの。目の前がちょっと
ブレた気がしたのは——

気がした？ ううん、そんなわけない。

「よう、いらっしやいブキ嬢 いや、ブッキーちゃ

ん。遅いねえ、塾帰りかい？」

目の前には、さっきまでいなかったはずの、かお
るちゃん。

わたしとふたりだけのときは『ブキ嬢ちゃん』な
のに、いま言いなおした。タルトがいることにつか
り忘れてた、ってことよね。っていうことは

「またどっか行ってたんでしょ、わたしたちにだまっ
て!!」

車はさっきから止まったままだけど、もう騙だまされ
ないよ。かおるちゃんなら、なんでもやりかねない
んだもん!

「ああ、ちょっとね　ちょっと、妖精になってきた
んだよ」

「へ？ かおるはん、妖精やったんか？」

「言わなかったっけ？ オレ、天才だから。Climb Every
Mountain　なんでもやってみなきゃ、くへはっ」

「答えになってへんで！」

タルトがかおるちゃんに突っ込んでるのを横で聞

きながら、わたしはじーっとかおるちゃんの目を覗き込んだの。

じーっ、じーっ

「はいはい、こーさん降参。ちょっとね、プリキュアは連れて行けないところに、お見舞い行ってきただけ」
お見舞い？

「彼が元気になったら、みんなで行ってみよつかねえ。
Climb Every Mountain それもひとつの山だからぞ。
くはっ」

—おしまい—